琵琶
機関紙
京絃
第185号　京絃社

西郷どんは細身で精悍だった

西郷隆盛といえば東京上野の銅像か、或は官服で身を固めた堂々たる体格の肖像画を思い浮かべる人が多いだろう。処が「維新の英傑西郷さんのイメージは丸っきり違う。関係者は勇気を以て訂正を…」と呼びかけている人がある。新しい〝西郷像〟の資料を発見したのは京都市の宇高随夫さん（六二）。宇高さんは一郷土史家で、これまで皆無と云われた西郷さんの〝真影〟を全国数ケ所から集め「西郷さんはあんな肥満体ではなく、寧ろ細身で精悍な容姿だった」と断言している。歴史家や琵琶を語る者にとっては、単に「ああそうか」では済まされないような気がする。

宇高さんがこれまでに探し出した資料は富山市内、岩手県宮古町、長崎市、それに鹿児島県下を廻って入手したもので、肖像写真やスナップなど計四枚。一勿論四枚の人物は完全に一致している。

これ迄親しまれてきた西郷隆盛像はフランス人キヨソネが明治十六年、実弟の西郷従道や大山巌など近親者をモデルに画いたもの、要するに写真でなくて絵であり、それも西郷の死後六年もたってから作画されている。西郷の甥で現法務大臣西郷吉之助氏が隆盛の未亡人から直接聞いたところによると「あんな顔じゃなか。からだも太っちょらん」という。

発見された四枚の写真の内、富山、岩手、長崎の三枚は、装丁や大きさは違うが表情やポーズは全く同じ、恐らく一枚の原版から焼付けたものと思われる。何れも戦前地方紙や小冊子に発表されているが、各地バラバラでその時の話題だけに終ったようだ。残りの一枚は薩摩藩主島津公や諸重役と撮影したスナップで「少しぼけているが他の三枚の人物に間違いない」と宇高さんは云い切る。

是等の中で最も信頼の出来るのは、富山市の菊屋峯吉未亡人の残した写真、峯吉は坂本龍馬に仕えた町人で、維新前後は京都に住んでいた。西郷と龍馬の交際は衆知の通りで、峯吉の手に西郷の写真が渡っても不思議はない。峯吉が死ぬと未亡人は富山に引上げ、今日伝えられる問題の写真は、未亡人の死後遺品を整理する際土蔵の中から発見された。日本史研究家の京大奈良本辰也氏は「非常に貴重な資料だと思う。西郷隆盛の写真は従来一枚も出ていないから、之が本物だと立証し来れば西郷さんの顔は書換えられることになる。私の印象では長男の菊次郎にも似ている。入手経路、前後関係など今一つの裏づけを期待したい」と云っている。

長男菊次郎とは、才八代京都市長西郷菊次郎で、宇高さん自身この菊次郎を知っている。宇高さんの祖父は土佐藩の画家で河田小龍と号した。明治二十一年入洛して中京区押小路両替町に居を構えたが、その向い側が西郷菊次郎邸であった。河田小龍は薩摩藩士と親しかったので、菊次郎邸にもよく遊びに行った。

河田小龍は維新史のかくれた逸材で、土佐藩時代うら若き坂本龍馬を指導して、新思想を吹込んだのはこの小龍である。「五ケ条の御誓文」の骨子である龍馬の「船中八策」には、小龍著「漂巽紀略」の影響が確実に読みとれる。更にこの本は帰国したジョン万次郎（中浜万次郎）の身柄を預かった小龍が、その見聞を克明にメモし、絵を描き入れて纏めたものにほかならない。

西郷と違って龍馬には立派な写真が残っている。維新後逸早く各界から資料の提供があったからで、宇高さんも宮内庁に写真一揃えを差出した。明治百年プームの中で龍馬の周

○…錦心流秋の公演　九月二十一日金沢市石川県婦人会館（主催一水会金沢支部）金剛石丁一同　月下の陣丁殿田　葉　龍の口丁奥村荘水　石童丸丁山溪水篁屋島の誉丁村田錦僮　西郷隆盛丁中川流水　若き敦盛丁坂井旭蘭　戦艦大和丁八田錦琿　坂崎出羽守丁田中篁水　舟弁慶丁八田夏水　川中島丁水谷充水　本能寺丁福井内田景水　龍の口丁富山長南旭秀　ひめゆりの塔丁滑川戸田頌水　城山丁富山田中歩水　柴田勝家丁福井吉野洲水　新撰組丁東京友吉澄水　井伊大老丁東京山口速水

○…錦心流第二十四回研修演奏会　九月二十八日大阪府立労働会館（主催一水会大阪支部）月下の陣丁菊地庸子　湖水乗切丁植田豊水　白虎隊丁古田東水　小栗栖丁尾山好水　巨星墜つ丁中山鳳水　恩讐の彼方へ丁小川吟水　西郷隆盛丁米沢珈水　河内の宿丁東憲水　賛助出演母常磐丁木村節子・絃三蒲蓮水　同城山丁竹内吟洲・絃蓮水

○…琵琶楽コンクール　九月二十八日東京銀座交詢社ホール（主催日本琵琶楽協会）兵士と母丁西村錦風　桜狩丁柏木篁遵　彰義隊丁柴野遺水　菅公丁河合とも子　城山丁須田岳誠　小松の操(二)丁鈴木鶴岡　関ケ原丁広瀬翠紅　さくら花丁弘沢雨水　羽衣丁山本隆水　秋の祈り丁井上雅朔　茨木丁押川旭葉　吹雪の敵丁山田洲鳳　迷語もどきギヤソシュ・ジョージ　彰義隊丁古家絃風　本能寺丁加藤喜水　白虎隊丁東錦堂　松の廊下丁伊藤磐水　月の先陣丁円谷弓水　新曲白虎隊丁板倉穣水　旅丁山下晴風

○…名曲演奏会　十月五日京都山一証券ホール（主催三美会）　湊川丁平井衣子・絃春　頌　那須与市丁田中鷗水・絃華水　弁財天丁高島旭芳、角田旭優、谷口旭芳、吉田旭晶・三絃旭雄、絃旭美津、旭香、旭華、旭照、旭翠　大物の浦丁中島旭穂、若宮旭登・絃旭岡　湖水乗切丁反町紫水　梅原旭濤　補疾間丁木村維水　小栗栖丁菅旭香　新撰組丁植村寛水　四天王寺絵巻丁天津旭八千代・絃旭岡　川中島丁桝本旭風　天野屋利兵衛丁吉野洲水　日本海大海戦丁平井春嶺　定君丁矢吹旭美津・絃旭華、旭照、旭邑、旭華・立方山村若孚佐　西郷隆盛丁伊吹正陽　関ケ原丁林田旭華　戦艦大和丁三浦蓮水　厳島の戦丁板谷旭邑　大楠公丁西村旭一声　明月逢坂山丁鈴木密水　玄上丁馬頭槍水　曲垣平九郎丁山崎旭翠　高山彦九郎丁松岡旭岡

○…武絃会第七十四回研修会　十月五日小金井市福祉会館（主催同会）　川中島丁呉究静軒　宇治川先陣丁大村鼓城　屋島の誉丁五十嵐清華　山科の別れ丁中村修水　桐一葉丁小嶺枳水　吹雪の敵丁高彩洲靖　茨木丁伊藤磐水　新曲紅葉狩丁菊地甘水　龍の口丁渡部喜山　湊湯江丁坂本錦道　菅公丁加藤喜水　旅順開城丁清水源城　井伊大老丁杉山桜正　金剛石丁土田昇龍

○…日本旭会第三十九回全国大会　十月十一、十二両日昼夜神戸海員会館（主催同会、司会神戸旭会）　才一日一部義民の遡外十四曲、二部良寛さん外十四曲、三部山吹の夢外十六曲、才二日一部小栗栖外十三曲、二部月に思ふ外十六曲、三部五条橋外十五曲　出演者橘旭翁、松岡旭岡、藤巻旭鴻、柴田旭堂、仲川旭朋、秋元旭晨、伊藤旭暢、浜本旭好、天津旭八千代、桝本旭風、塩谷旭洲、高木旭昭、末広旭馨、梅原旭濤、中島旭穂、若宮旭登、戸倉旭嶺（順不同）その他多数

○…山崎旭翠会東京本部創立記念全国選抜大会　十月十二日東京日本橋才一証券ホール（主催同会）五絃段丁会員一同　大蒲公丁東京川島旭章　荒城月夜の曲丁戸畑瀬戸内泉美　桐一葉丁東京小島旭清　舟弁慶丁神戸松尾旭遜　熊谷入道丁戸畑日高旭量・絃旭泉　田村邸丁京都田中旭法・絃旭美津　西郷隆盛丁東京糸目谷旭総　北の庄丁同野村旭稲・絃旭柳　彰義隊丁同木村旭桂、花方旭路・絃旭翠　禅師と正宗丁神戸安住旭康　本能寺丁広島長井旭美・絃旭邑　井伊大老丁東京原田旭鳳　白虎隊丁東京佐藤旭天紅、米子田子旭園・絃旭翠、旭雄　龍の口丁東京川喜多旭麗　源実朝丁京都矢吹旭美津　静丁東京安藤旭捷　琵琶楽独奏丁大阪大滝旭雄　羅生門丁名古屋石河旭豊穣　那須与市丁東京井坂旭良　川中島丁箱根押川旭葉　弁財天丁歌旭桂、旭路、旭美津、旭麗・絃旭良、旭奎、旭龍、旭翠、旭蘭、小絃旭雄　別れの盃丁神戸大迫旭山　青葉の笛丁大阪佐伯旭映　戦艦大和丁小倉小野旭枝　曲垣平九郎丁戸畑友田旭泉　大楠公丁同江本旭清　関ケ原丁彦根林田旭華　土ぐも丁広島菊地旭蘭　羽衣丁歌旭映、旭天紅、旭園、旭華、旭葉・絃旭泉、旭枝、旭清、旭邑、旭翠、旭柳、旭蘭、旭豊穣、旭良、三絃旭雄　粟津ケ原丁神戸久徳旭蘭、淡輪丹生谷旭春・絃旭翠　豊太閤丁東京松村旭奎、同木下旭龍・絃旭翠、旭雄　厳島の戦丁広島旭邑　小栗栖丁名古屋西村旭一声　伽羅の兜丁東京上山旭濤　上杉謙信丁旭龍、旭翠、小絃旭雄・舞踊桃山玉園

〒603
昭和四十四年十一月一日発行（非売品）
編集者　植村寛水
発行所　京都市北区衣笠西馬場町二九・和田ビル二〇一号　京絃社　電話（462八三二六　461二八七六番）内線二〇一番

辺が生ま生ましく再現できるのも、こうした協力に負う処が多い。然しその他の人物に就てはあの激動の歴史に見落とされている人、或は間違った印象を与えられている人も決して少くはないのではあるまいか。

祖父河田小龍の遺品の整理から郷土史研究、更に維新史の追求へと大きく発展して行った宇高さんの動機もうなづける。「維新の歴史と云っても僅か百年前後の出来ごとに過ぎません。それなのに大事な人物が忘れられていたり、誤った人物像が羅り通っている。明治維新は日本にとって重要な意味を持っています。しかもお膝元の京都が舞台だったのです。私達は真実の人物を、歴史を、若い人達や後世に伝える義務があります。」という。

いつの世にも避け難いのは歴史の脚色、潤色である。明治百年ブームの中で繰拡げられた多くのTVドラマや伝記出版にしても、読者の中には「つい先ごろ死んだ人なのに、どうしてこんなに多様な性格の持ち主になって了うのか」と不思議に思う人も多かろう。だが真実は只一つ。〃西郷どんの素顔〃などその一例に過ぎぬが、この二つの〃素顔〃がどんな形で一つに絞られていくのか。我々は今暫く注目する必要があろう。（京都新聞から）

註ー我々琵琶人が好んで演奏する「城山」や「西郷隆盛」の曲は魁偉な、物に動ぜぬ堂々たる豪傑型の大西郷を脳裏に画きながら弾奏しているが、本記事が事実とすればこれまでのイメージを些か訂正する必要がありそうである。ー係ー

薩摩琵琶の流れ

柿本錦城

薩摩琵琶の流れは鹿児島流と東京流である。東京流とは、明治の始め出京した帝国琵琶の始祖吉水錦翁による錦水会の一派及び其門下、並に肥後錦獅の楽泉社流と、前記二師の指導を受けた永田錦心の一流を含めた流れである。

鹿児島流とは、吉水錦翁以後に出京した先生方に依る諸派を一丸として正派と称するが、其数は十指に余るので一々は云えぬけれども、何れも立派な腕前を持った方々である。此流派は東京流と一線を画して純正派という。

大体琵琶は個性が非常に強く出る芸術であるから、此面から見ると一人一派と云うのが正しいようである、時代は隆盛期から半世紀を経た今日、斯くあるべきと思われる。

現今錦心流は割合い団結しているが、其中でも個人個人を見ると大分違った芸風が生れている。従って始祖を異にする正絃会に至っては当然である、斯くてこそ琵琶本来の味（あぢ）なるものが滲み出て深みが生ずるのである。此の正絃会とて鹿児島流ばかりでなく、東京流から出た弾奏家も居て個性を発揮しながら、大体師匠の芸風を真面目に守っているようであるが、錦心流には随分異風の弾奏家が此頃現われて話題を呼んでいる。是も進歩の過程に於ける過度的現象と思い、私は頼もしく将来に期待を掛けている。

終りに、現在の吉水錦翁師は鹿児島で学ばれた方であるが、其の弾奏に対する精神は、先代の衣鉢を立派に嗣ぐ帝国琵琶である事を附記して此稿を終ります。

「平家物語」の物語（三〇）

―都大路に無情の風―

…おなじく二十六日、平氏のいけどり共鳥羽に着いて、やがてその日都へ入りて大路を渡さる。皆小八乗の車に前後の簾をあげ、左右の物見を開く。大臣殿は浄衣を着給へり…。

「元暦二年春の暮れ、いかなる年月にて…」一体この年はどうなっているのかと平家物語の作者は嘆く。幼帝は海底に沈み百官は波上に浮かぶ。そして大勢が関東武者に引捕われかっては平氏にあらざれば人にあらずと肩で風を切って歩いた都大路へ、今は捕われの身として帰って来たのである。

生けどりになったのは平家の総大将、前内大臣宗盛、大納言時忠、宗盛の若君ら三十八人、女院、女房達四十三人、乗せられた車は簾が上げられているので「みせもの」である。宗盛は白の狩衣姿、昔は色白で容姿端麗であった人が、潮風に黒ずみやせ細っている。囚人の列は鳥羽街道から羅生門へ。沿道はびっ

しりと見物人。都落ちして中一年をおいた許り、ごく最近の事だから京わらべも未だ平家全盛の頃を忘れてはいない。その人波を宗盛らの車はかき分けるように進む。車の中から宗盛はおどおどと見物人を見廻し、ぶざまな総大将のていたらくである。六条東洞院で車から見ていた後白河法皇の目も冷やかだったに違いない。宗盛は六条堀川の義経の宿舎に監禁され、五月七日義経に連れられて鎌倉へ。

頼朝との対面風景も見苦しいものだった。頼朝の言葉を座り直して聞き、心証をよくしようと畏まって承る。並居る関東武者達は腰抜めとあざ笑い「深山に居る虎は百獣も恐れるが、檻に入れられて了うと尾を振って人にこびる」と哀れむ者もいた。

六月二十一日京へ送還の途中近江篠原で斬られる。首切役橘右馬介公長は平家重代の家人で朝夕伺候していた侍だが、世にへつらうのが世間の慣いとは云いながら、余りな無情ぶりと人々からうとまれたという。

二日後の二十三日には検非違使達が三条河原で宗盛の首を受取り、再び都大路を引廻した上、獄門の木にかけた。

それにしても気になるのは義経である。平家一門の都大路引廻しは義経にとって得意満面の苦のものであったにも拘らず、この辺から義経は甚だしく優柔な人間になってしまう。原典には「判官情けある人にて」という言葉が頻繁に飛び出す。引廻される宗盛の車の牛飼に、永年宗盛に仕えた下男が世話させて欲しいと名乗り出ると「よしよし」。宗盛の若君の首を弔いたいから頂けぬかと平家の女房が申出ると「よしよし」。平大納言時忠が「頼朝の目に触れると殺される」と危うんでいた手紙を義経は押収して置きながら、時忠が娘と交換に返還を申入れると、その手紙の封も切らずに大納言に送り返してしまう。こうしたいくつかのエピソードは、単に「情ある人」というだけでは筋が通るまい。後の逃亡生活に見られる〃いくじなさ〃に通ずる微妙な変化が、既に義経の心の中に現れはじめていたのではなかろうか。ー義経も永い戦争に疲れ果てていたのであろうー。

狂酔亭漫録（四十八）

古谷竟水

京の東郊山科に隠棲した大石は、屋敷田畑を求め、建築庭園に数奇を凝らし、豊岡より妻子を迎え、誰が目にも末代までの計を立てた様に見せかけた。然し吉良の後楯上杉藩の英物千坂兵部は「大石程の傑物が主家断絶後おめおめ引込む筈はない、必定我等に油断させる計画で其虚に乗じて事を揚げるに相違ない」と看破し、数多く隠密を都に入れ大石及び一党の動静を探らせた。此事も亦大石の察知する所となり、愈々放蕩に浮身をつす事に成るが、之は如何にも敵を欺く謀略として尤も千萬だが、一面大石としては仇討を終ればそれ迄の命と覚悟し、謀計を口実に短い余命の間に男の欲望を充足させ後生に悔なきを希ったとも考えられる。彼は元来好色漢で、末だ部屋住の頃赤穂の御殿女中を孕ませ、主君采女正から大目玉を喰った事は記録にある。

大石の遊んだ場所は京の島原、祇園町、伏見の撞木町を始め、奈良の木辻、大阪の新町に迄及んだ。特に刷染を重ねたのは京〃島原升屋の夕霧、伏見撞木町笹屋の浮橋等で、又当時流行の陰間に迄及び、歌舞伎の花形役者瀬川竹之丞と深く契った事は有名である。

大石内蔵助作と称する地唄が伝えられているので稍々長いがご参考迄に収録する。

里げしき　本調子

「ふけて廊のよそほい見れば、宵の灯火うちそむき寝の、夢の花さへ散らす嵐のさそひ来て合（合）歯をつれ出すつれ人男、よそのさらばも尚ほ哀れにて、裏も中戸をあくる東雲、送る姿のひとへ帯、とけてほどけて寝乱れ髪の、黄楊の（合）小櫛もさすが涙のはらはら袖に、こぼれて袖に、露のよすがのうきつとめ（合）こぼれて袖につらきよすがのうきつとめ」

玆で芝居に出て来るお軽について一言する。彼女は遊女ではなく、素人娘が大石の妾になったのである。当時京都寺町二条に住む二文字屋次郎左衛門の娘で評判の美人であった。大石が赤穂離散当時、一旦妻子を豊岡の妻の実家へ帰し独居の時に、後に一味から脱退したが当時同志であった小山源五左衛門、進藤源四郎両人の奨めによりお軽を側女に入れたもので、再び妻子を引取る以前に実家に帰し

其後も度々忍び会っていた模様で歌舞伎のお軽のような派手な存在ではなかった。

序に料亭一力について言及する。之は実在のお茶屋万亭の事で現在も祇園花見小路四条の角を占める巨亭である。角引廻した高塀も表の門や格子は京都独特の紅柄塗で、一面に見事な赤壁である。大石の遺品等もあり、又毎年大石忌を営んでいるが営業政策の様にも思われ、果して大石が通ったか否やに就ては多少の疑問を抱く人もある。去る昭和二十四年頃京都の某骨董屋が大石の真蹟と見るべき書幅を入手し之を万亭に見せた折、十二万円と称する高値の為か万亭は之を買わなかった。

芝居忠臣蔵の作者は実名使用を憚って万の字を二分して一力と称し上演したので、実際は一力でなく万亭である。主人は現在迄代々次郎左衛門を称えているので、前記お軽の実家二文字屋次郎左衛門と何等かの関連があるかも知れぬが之を調査する資料は無い。

然し大石の放蕩やお軽の件は、間者により江戸吉良方に報ぜられ、仇討計画が一種の夢と信ぜられた効果は著るしかった。

大石最後の江戸入りは元禄十五年十月六日京都出発であるが、その前紫野瑞光院に分葬の内匠頭墓前に詣で計画を報告し、その足で二文字屋を訪れお軽に最後の別れを告げた。

琵琶や浪曲で演ずる山科妻子別れは、この直前の事で脚色は兎に角事実には相違ない。

大石東下りの道行を叙した古書の七五調の名文が快挙録に紹介してあるが今之を記す遑が無い。大石は日野家用人垣見五郎兵衛と偽称し十月二十一日鎌倉雪の下到着、二十六日平間村隠家に到り、江戸の様子を窺った後、十一月五日江戸着、長男主税の寄留先日本橋石町三丁目小山屋に同宿した。

大石は討入準備、同志との打合せ等多忙の中の時間を割き又々遊蕩に没入した。この案内兼指南役は鍔屋宗伴だとの説が古来伝えられるので之に就て一寸説明すると、彼は元来赤穂藩士であったが武士の道には暗く、逆に世情に通じ商才に長け、殊に書画骨董刀剣の鑑識眼は抜群なので、大石が城代時代本人に対し将来商法を以て立身すべく諭し資金若干を与え暮夜密かに逐電させたのだが、之が江戸に到り諸大名旗本衆や富家に出入し、骨董商として成功巨富を蓄えて、下谷の某処に大店舗を構えたのである。

宗伴は恩人大石を大歓迎し、通人の彼は江戸中の遊所は勿論、当時流行の比丘尼茶屋まで案内した。元禄末期には風俗頽廃極に達し比丘尼と称する尼僧姿の娼婦が跋扈し之にも上中下の格差があり、その上品は寺院風の家を構え、仲々の格式を保持した者だと風俗史は伝える。大石はこの比丘尼にも馴染み討入前日の十三日夜も泊り込み翌十四日は朝帰りのまま討入連を指導したと伝える本もある。

さて此の鍔屋宗伴の事は物語や小説には屢々出て来るが、史実と思われる資料中には其名を見出し得ず、赤穂在藩中の姓名すら判らない。結局之も疑問の人物で、前回の村上喜剛同様、史実を御存知の方は御教示下さい。

続・琵琶界物語（二〇）

私の企画した琵琶発展策（3）

清水史水

その後も自作「悲壮三脚の伝令」を各地で歴演したが、大東亜戦争中の昭和十八年から十九年に亘り、関西所在の鐘紡十四工場と大阪郊外の防衛隊や、神戸小学校児童の集団疎開先城崎温泉などで、主として産業戦士や学童慰安演奏旅行を計画し、京都大阪の琵琶人数氏の協賛を得て同行、公演回数二十六回に及んだ。城崎温泉では数ケ所に分宿就学中の学童約千人をゆとうや温泉旅館の大広間に集め、学校当局の要望で戦争新曲の外に「白虎隊」と「兎と亀」を併演し、少年のあどけない身を親の膝下から離れて健気にも勉学にいそしむ児童に喜ばれ、意義深いものがあった

今は亡き石田鶴水氏と二人で鐘紡福知山工場の慰問演奏後、市内の明智光秀を祠る御霊神社に参詣したが、宮司の話では光秀公が福知山城主に転封されて以来、それまで領内には強盗殺人等が頻発して治安悉く荒廃していたのに、光秀公の善政で大革新され、その恩恵で領民挙って安堵の生活を営むことが出来、敎国の大恩人である武将として敬慕し、この神社を建立したとのことで、我等二人は琵琶曲を通じて光秀公の人柄を偲んだ。又京都工場の慰問行では東京の松田静水師、京都の山田鶴水、故大久保寛水と筆者の四人で、貞明皇后の御座所のある大広間で大勢の従業員を前に慰問演奏をしたのが印象深い。

終戦直後の昭和二十二年春、九州別府温泉へ旅行の折、「別府航路」の自作新曲を提げて四国演奏旅行を企て、尺八名人の親友清水路山氏の函賛同行で、高知市外伊野製紙工場慰安会が維新の志士坂本龍馬の銅像のある名勝桂浜の松林で催されて、尺八合奏「河中島」の一曲を演奏、翌日同工場で「別府航路」を合奏した。

翌年正月、四国宇和島市の澱粉工場や八幡浜市の製糸工場で、路山氏と「別府航路」を合奏し、帰途筆者だけ瀬戸内海小豆島の一孤島に寄港し、知人の農家に村人四十人余り集りの席上右曲目と外に一曲演奏したが、この島の対岸には美しい島々が連なり、かって見た事もない美観であった。

その年の秋、琵琶湖畔坂本電線工場に路山氏と共に「別府航路」を演奏、また郷里越後長岡市でも同曲を五ケ所で演奏して戦死者の英霊を慰めた。（此項未完）

維新前後（上）

桂旭采

攘夷開国論が渦を捲いて安政の大獄という暴風が吹き荒み、梅田雲浜をはじめ多くの志士達が処刑された。

万延元年春三月、江戸桜田門外で大老井伊直弼が討たれ、京洛の巷にも天誅の血しぶきが続いた。近藤勇を隊長とする新撰組が都大路をわがもの顔にのし歩き、勤皇浪士と佐幕派が連日花の都を血で染めた。寺田屋事件、池田屋事件、坂本龍馬や中岡慎太郎らが殺された。その間、孝明天皇の御妹和の宮が御婚約の有栖川宮との仲を割かれ、将軍家茂に降下されたし、桂小五郎（後の木戸孝允）と東三本木の芸妓幾松との恋物語も、血腥い中に噂にのぼった。中でも人々の脳裏から消えないのは、御所を中心として二万八千の人家が焼かれた蛤御門の戦いであった。三条、四条の河原には避難民が溢れ、大津への街道は家財を背負った人の行列で埋まった。

慶応と改元された前年の元治元年七月二十日、嵯峨天龍寺総門前で、一人の大坊主が薩摩軍の大砲の前に立ちふさがり、隊長を睨みつけていた。

「…長州兵など居らんと云うたら居らん。」

「それは解っちょる。」

「ではなぜ寺に大砲を向けるのか。」

「……。」

久坂玄瑞、来島又兵衛、久留米水天宮の元宮司真木和泉らの率いる長州兵と、蛤御門や中立売御門で戦ったのは、昨十九日激戦の後これを退けたが、桂小五郎を隊長とする一隊に陣地を貸した天龍寺である。洗討ちにしなければ胸が治まらぬ。それに長州勢が渡月橋を渡り、松尾から山崎へかけて敗走したあと寺へ攻め込んだ先発隊が寺の土蔵から米三百俵や寺宝などを盗み出し、相国寺の薩軍本陣に運びこんでいる。是が非でも天龍寺を攻撃して証拠を焼いてしまわないと、永く盗賊の汚名を残すおそれもある。

総門の前（今の京福電車嵐山駅あたり）に大砲を据え、今まさに〝撃てー〟の号令をかけようとしたとき、のこのこと才槌頭をふり立てて、この坊主が門から出てきたのである。

「白昼強盗にも等しい所業をしておきながら、それでも足りずに今度は大砲かッ」

「何ば云うか、一体おはんば何者じゃ」

「おぬしこそ誰じゃ」

「おいどんな薩摩軍の隊長村田新八。」

「わしはこの寺の執事じゃ」

六尺豊かな大坊主は、白刃をかざし殺気立つ薩摩兵に取囲まれながら、ギョロリと目をむき顔色一つかえていない。

「えッ、ではあの高名な挙骨和尚？」

「イヤ挙骨は兄弟子の義堂和尚のこと、わしは滴水じゃ。」

新八の脇の下に冷汗がにじんだ、弟の滴水にして然り、まして〝義尚八尺雲渡を撫す〟と云われ、新撰組の土方歳三ですらその一喝に縮み上ったという義堂和尚が出て来たら…

「隊長、どぎゃんしもす？」部下はイライラしている、一諸に戦った会津、桑名への面目から云ってもこのままでは済まされぬ。

「イヤ御坊の申し条尤もと存ずる、さりながら禁裏に砲火を打込んだ長州勢の本拠に対し一発も打たずに引上げる訳には参らぬ。よって三発だけ空砲を打つ」
「空砲だけじゃな。」
「武士の一言でござわす。」
「ならば致方あるまい。」
大坊主はスタスタと去って行った。
「隊長、あの坊主は？」
「ふむん、恐ろしか奴じゃ、げんこつ和尚もこわいが、あの坊主の方が一枚上わてかも知れん。」　（未完）

三美会の琵琶名曲演奏会

秋晴れの十月五日(日)正午から京の繁華街四条堺町の山一証券六階大ホールで華々しく首題演奏会が開催された。暑からず寒からずの絶好の秋日和で四条通りは人の渦で埋まり、今秋最高の人出と翌日の新聞で報道されていたが、演奏会場は別天地のようなムードで、既に開演一時間前約三十人の聴衆が押かけ前景気は頗る上々で、定刻十五才の平井春嶺氏令嬢衣子さんの「湊川」の序奏で開演し、引続き筑前橘会流を中心に、協賛の薩摩、錦心、旭会各派の一流人揃いが夫れぞれの特技を生かして演を競い、一曲ごとに万雷の拍手が堂を動がしたが、二時ごろには三百五十の定席は満員となり臨時に五十の補助椅子を増設しても尚収容しきれず、後ろに立ったまゝ静聴する人も沢山あった。

演曲二十題は地元を始め東西各地の名士の演奏で何れも好評嘖々裡に終り、最後に特別出演の鈴木、山崎、松岡三師の熱演で有終の美を飾って七時十五分目出たく幕を閉ぢたが、当日の圧巻「淀君」は歌を会主矢吹旭美津、絃山崎、板谷、林田、三木、立方山村若孚佐各師の共演で、歌、絃、舞が心憎いまでに一致し聴衆を深く感動せしめた。また鈴木密水師の「名月逢坂山」曲中、深山に生じた一滴の水がやがて瀬となり淵となり、最後に大海に注ぐ水の変態の微妙な弾法は迫真の神技というべく、琵琶楽極致の感を深くした。

尚当日京都琵琶協会の殆ど全員とその門下が、終始献身的に会の円滑運営に協力したその友情は、誠に美しい光景であった。（演奏者と曲目別項「よもやま」欄参照）

鈴木鉦次郎氏への感謝会

東京鈴木鉦次郎氏は多年に亘り私財を投じて琵琶界功労者や優秀弾奏家に沢山の金盃や楯を贈って表彰し、併せて斯界の発展に貢献されているが、今回琵琶関係の才一人者二十四氏の発起により鈴木氏に対し感謝の意味で十一月一日東京上野の精養軒に同氏を招待して晩餐を共にし、席上記念品贈呈の企画を建て全国各流派の琵琶人に勧誘状が発送されたが既に百数十人の参加申込みがあり当日の盛況が予想される。（遠隔地で当日出席不可能の人は記念品贈呈のみの申込みも可。発起人事務所は東京都練馬区豊玉北五ノ十一芸の友社内）

琵琶予演告会
時　十一月二日(日)午後一時開演
所　西宮市夙川公民館松下ホール
主催　三浦蓮水会
琵琶、詩吟、詩舞、琵琶舞、剣舞等三十数番（入場無料）

白峰神宮大祭奉納　崇徳、淳仁両帝を祭る京都白峰神宮では崇徳天皇秋の大祭を九月二十一日(日)斉行され午前の祭事に引続いて午後から舞踊、吟詠、琵琶その他の奉納が盛大に行われたが、琵琶部は京都琵琶協会から小林旭光氏（敦盛）と植村奠水（新撰組）が神前で厳粛に献奏して神霊を慰め一般参詣者を感激させた。

大阪琵琶同好会の名月観賞と演奏会　中秋名月の九月二十六日夕方から琵琶湖畔の雄琴温泉雄泉閣に於て首記開催。当日は朝から強風雨で月を賞する事は不可能かと案じられたが日没頃から晴れて東天に昇った満月は湖上に映じて、えも云われぬ名月の夜となりすがすがしい気分で琵琶を弾じて多数の来聴者にも喜んで貰った。出席者石田三郎、秋

田楓葉、玉柏旭松、大崎旭成、中村旭正、矢野旭信、島津旭抱、石橋旭嶺諸氏（石橋氏は朝日放送ラヂオで姫百合の塔詩吟入の録音を済ませ近日中に放送される）

京都琵琶協会研究茶話会　時臨時茶話会を市内徳雲寺大広間で開催。一両日以来俄かに秋らしく爽快な気分の裡に伊吹正陽、田中鵬水、矢吹華水、古谷竟水、小林旭光、木村維水、水内媞水、平井春嶺、植村奠水諸氏が一曲或は二曲熱演したあと各種事項を協議して八時半閉会。

②十月四日(土)午後一時から会員田中鵬水氏宅で、翌五日に催される三美会演奏会に特別出演のため此の日入洛された東京鈴木密水氏を迎え歓迎会を兼ねて十月定例茶話会を開催、主賓鈴木氏を囲んで和やかな雰囲気裡に平井、木村、小林、古谷、矢吹、梅原、中島旭、若宮、田中、伊吹、植村の各会員が列席し会員の寸演に続いて鈴木氏の「旅の芭蕉」を歓賞したあと田中氏の好意による御馳走と共に七合入朱塗の大盃に並々とつがれた清酒を着席順に廻し飲みして琵琶黒田武士の森太兵衛を気どりメートルをあげて八時解散した。

③十月九日横須賀の名花斉藤妹水女史御夫妻の入洛を迎え古谷竟水氏の斡旋で夕刻から市内頂妙寺真浄院で協会主催の歓迎臨時茶話会を催した。出席の過半数は先年来京されて以来の顔馴染で打とけて演奏や懐旧談に花が咲き秋の夜長を楽しく過ごした。出席者伊吹、田中、中島真、中島旭、梅原、矢吹、古谷、木村、平井、植村各会員の外奥定天錨、馬場関口諸氏。十時散会。

琵琶を議ります　薩摩琵琶片桑三面、筑前琵琶四絃五絃各一面、何れも完全手入れずみ、希望者は静岡市沓谷三丁目一九三ノ二、伴野鶴風氏に照会されたい。

――（予　告）――

△…京都琵琶協会月例茶話会　十一月一十三日(日)午後一時市内千本出水西入徳雲寺（電話463六九五二番）。当番幹事小林旭光、水内媞水両氏。同好者の御来遊歓迎

△…三浦蓮水演奏会　十一月二日(日)昼、西宮市夙川公民館松下ホール

△…吉野洲水会演奏会　十一月八日(土)夕・福井県鯖江市公民館

△…水藤錦穣演奏会　十一月十四日(金)、東京才一証券ホール

△…日本芸能名流大会第二回日本の宴　十一月十五日(土)昼夜、京都祇園甲部歌舞練場、琵琶は山崎旭萃、井坂旭良両氏（主催日本民主同志会）

△…日本琵琶振興会例会　十一月二十三日東京新宿駅前尾津才二ビル

――（転　居）――

山崎旭萃氏　大阪府高槻市津之江町二丁目十二ノ三（電話申込中）

言寸（3）

近藤勇

御存じ新撰組の隊長近藤勇、諸藩の倒幕の志士を京洛で殺傷したが官軍と甲州城で戦って敗れ、のち下総で捕えられた。武州板橋で斬られた時は三十五才の若さであった。遺骸は故郷三鷹の龍源寺に埋められたが、首級は塩づけにして京に送られ、三条河原で罪状書の立札と共にさらされた。

よもやま（敬称略）

○…武絃会第七十三回研修会　九月七日小金井福祉会館（主催同会）　門出ー渡部喜山　川中島ー呉究静軒　紅葉狩ー五十嵐清華　橋大隊長ー高杉洲靖　乃木大将ー土田昇龍　二条城の清正ー伊藤磐水　山科の別れー中村修水　重盛涙の諫言ー大村歧城　舟弁慶ー佐藤皓水　新撰組ー村木桜柳　墨絵ー坂本錦道　彰義隊ー清水源城

○…輝絃会第一五一回研究会　九月十八日東京吾妻橋会館（主催輝絃会・錦友会）　龍の口ー内田琴水　雪晴れー小峰調水　橋大隊長ー宇田川海水　村上喜剣ー伊藤磐水　月下の陣ー佐藤皓水　湖水乗切ー関恵水　鴻の宵月ー菊地甘水　川中島ー佐藤源水　舟弁慶ー加藤夷水　重衡ー角田澄水　城山ー直井洋水　静ー熊木施水　吹雪の敵ー大沢喜水　小栗栖ー杉本淳水　桜狩ー後藤朗水　乃木大将ー松本藷水